



次世代下宿「京都ソリデール」

高齢化社会と呼ばれて久しい日本ですが、昨年総務省が発表した人口推計によると、65歳以上の高齢者は28%を超え、高齢化社会はますます進行しています。住民基本台帳による京都の人口は、約255万人（2019年1月）で13年連続で減少し、高齢者率は全国平均に近い29%となっています。（京都市は、日本の大都市の中で学生数の人口比が一番高いことを考えれば、実態の高齢化率はさらに高いような気もしますが）

当然のことですが、高齢者率の上昇は、高齢者世帯の増加につながります。特に単身高齢者の場合、社会から孤立しやすくなることが懸念されています。

そんな中、京都府では次世代下宿「京都ソリデール」という事業を平成28年度から開始しています。ソリデール事業は、高齢者と若者（学生等）が同居し、交流することで定住を促進する取組み。京都府と事業者が連携してすすめており、まさに現代版下宿暮らしとして注目されています。（ちなみに、ソリデールはフランス語で“連帯”を意味します）府が公募した事業者は、企業やNPO法人、高齢者生協などで、高齢者と若者の相性なども見ながら慎重にマッチングします。

「京都ソリデール」は、高齢者宅の空き室を、大学生に低廉な家賃で提供し同居・交流することで、一人暮らしの学生には、経済的なメリットはもちろん、日常のほどよい交流で得られる安心感があるとのこと。そして、部屋を提供している高齢者にとっても、空き室の有効活用だけでなく、人と触れ合えることで、生活のはりや認知症の予防、見守りにもつながっているようです。

SDGs（持続可能な開発目標）を実現するために、国や企業、多くの団体でも様々な活動がすすめられています。安心して暮らせる、こんな日常のコミュニケーションがとれる身近な仕組みや、工夫が大事なのではないかと感じています。

(2020年1月)